

●アトリエ訪問

折原久左エ門 会員

袴腰岳のすそがたくさんのひだを作りながら湯の川温泉の手前の台地で切れる。この台地からは湯の川温泉を一眺にし函館山や立待岬と共に前方にひろがる太平洋の水が光って見える。折原さんのアトリエのある戸倉町はこの台地の上であって、その風光の良さではちょっと類を見ない所といってよい。最進ぞくぞく住宅が建って大学の先生やお医者さんなども多く住む文化地域である。

ブロック建ての住宅の二階約30平方メートル、道南工芸のセンターになればと考えて居られるというこのアトリエはガス水道が引かれ、金工用具が一杯に置かれ、棚には表面処理用の薬品や用具が並べられていて氏の制作の場所でもあり、若い人々が来て仕事もし寝泊りも出来るように作られているというわけで氏の心意気がうかがわれる場所である。壁に民芸品がかけられ、あちこちに氏の作品も置かれている明るい部屋である。

全道展の他に日展、現代工芸展が主に氏の発表の場所である事は御承知の通りであるが、近頃は鋳造をも手がけて制作の内容を拡げて居られる。

——工芸といってもさらに仕事の範囲を広げて建築金物などに、また広い意味で建築も工芸であるとも考えられることからそんな建築の仕事にも進んで行きたい——と云われる折原さんは話をしていると童顔といってもよい若い表情の中にきびしい抱負を示される。歯を病んで最近3キロもやせたと云われるが近頃身体つきもたくましくなった様にお見受けする。工芸界のホープとしていよいよ発展される事であろう。

アトリエからの眺めはよいし、部屋の雰囲気も落ち着いているからなのだろうつい長居をしてしまった。元気な二人の男のお子さんとしとやかな奥様に送られて門を出ると函館山がけぶるように美しい。

45.6.1



鎌田俳捺子 会員

たいやう優雅な生活に思えた。招じ入れられた玄関の正面には児島善三郎の花の絵がある。それは何げなくそこにある感じながらこの家のご主人のお容様に対する憎いまでの心づかいが感じられるもので。玄関に立っただけで豊かな気分させられる。失礼して奥へ、南に面した広い応接間、テラス越しにチューリップ・ライラック・ツツジ・バラ・ボタン・とりどりの花が美しい。「優雅なお住いですね」とつい口に出た。「あらそうかしら」といささか不満そうなお返事、恐らく訪問者の誰もが同じ事を言うのだろう。コーヒーを御馳走になる。これはここだけの話だがその手もとの危かさ、それはとても主婦のものではない当節は男の子だってもっと上手じゃないかと思える程だ。

ベチカの上に山口薫の初期の作品がおかれていた。それはドラムまたまゴーギャンの影響が見られる珍しい作品だった。外に鳥海青児森芳雄その他大へんなコレクションだ。

こと話が絵に及ぶと急に目が輝き、先ほどコーヒーを入れて下さった人とは別人の感がある。静から中にも情熱的な語りくちはブルシアンプルーの冷たい強さとパーブルマッドのしゃれた烈しさ。まさに鎌田さんの作品をほうふつとさせるものである。いまアトリエが新築中だ、見る間に柱が、屋根が形づくられて行く工程をじっと見つめられる目が熱い、着着かなくて描けなとおっしゃるがこれで着着かれた後のことを思うと恐いみたいだいい作品が生まれることだろう。

「もう一杯いかが」とすすめられるコーヒーを私は遠慮した。



訪問者 花岡 一 会員

北岡 文雄 会員

天恵によりそれは計らずも個展訪問となった。
(註、先生は5月25日から31日まで銀座兜屋画廊で個展を開かれた。)

初夏の風が吹きぬける涼しいギャラリーには観覧者がひきもきらず伺ったその時にも前田政雄氏や小林ドンゲさんなどが見えておられた。

なんとおだやかな、やわらかいそして秘めた情熱がチラリと光る先生の木版の魅力は版画にうとい私の感受性を一べんにゆり動かし洗脳されて了った。

春陽会々員、日本版画協会委員、日本美術家連盟理事などと云ういかめしい肩書きに反して静かに豊かなお話はやさしく語りかけてくる版画の一つ一つにも繰返されて濃厚なお人柄が偲ばれるの

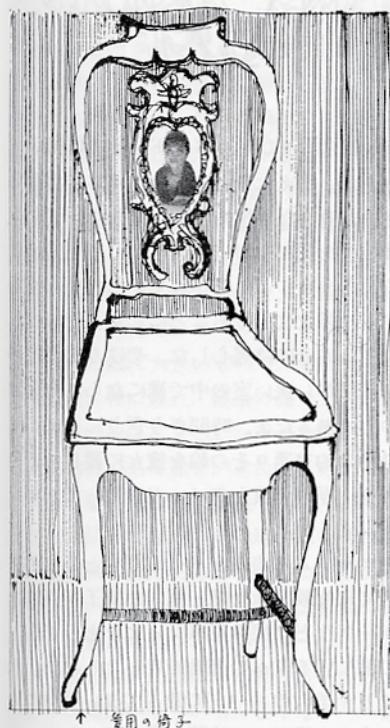
である。それは先生の歩んでこられた道ノリの険しさと長さによるものであろうが世界中を駆けめぐるそのエネルギーな国際的創作活動をみてもうなずけるのである。1955年パリ、フランス国立美術学校留学、1964年米国ミネアポリス美術学校交換教授1965年～69年間にミネアポリス美術館、エヴァソン美術館、ボストン美術館美術学校、シアトル万博美術殿堂の各所で個展を開き、アメリカ文化センターの巡回展CTC……その国際的な骨格の太さとダイナミックな量感やはり確実に作品に表現されているのである。入口近くにある「ニグロの女」は民族性のたくましさをとらえた迫力が——また、「シカゴの夜景」「ニューオーリンズの街角」は華やかな世界性が——そしてあまりにも東洋的な「詩仙堂」春秋の庭の花々、「三千院の庭」の幽幻な誘い、「妙心寺山門」の静寂、そして「春の銀閣寺」のいぶし銀のなかに、遠い古典を感じるのである。これらの作品に心うばわれこの小さき宝石の数々のなかに酔った。

この時美しい奥様が見えられお話を伺う。

先生のアトリエは木版の制作だけなさるのであまり広い場場を要せずかなり広いお部屋を洋風と和風に仕切り制作は洋間フローリングの方でなさるとの事、朝夕欠かさず吞まれるコーヒーは薄めのブラック、奥様が入れるコーヒーの味はま格別のおいしさ、美しい宝石を生み出すイメージの根源はきっとこのコーヒーの香りに秘められているにちがいない。

先生の静かなそして鋭い目でみた世界を、日本を、自然を、花を大きく大きく擁しながらやがて先生の小宇宙へと集結されてゆくその見事さに唯々心うたれる思いであった。

「とにかくじっくりと、そしていつまでも続けてゆくという事が一番大切ですね」とおだやかに話される先生の瞳には、影る、というその事にすべての心をつめそれを着々と積んでゆかれる情熱が溢れ「また海外にも行かなくては……」と遠くの光をみつめられていた。こうして私は心一杯宝石をつめこんで酔心地のまま、おいとまをしたのである。



↑ 奥様の椅子



訪問者 竹岡 羊子 会員



訪問者 安多 郁子 会員

熊谷 善正 会員

「イヤ、ローマでは思ったほどでもなかったね。だいたい俺をチネゼ（支那人）かモンゴリアン（蒙古人）と間違えるやつもいたよ。もう少し美男子で通ると思っていたんだが残念だったね。それに外遊した連中はほとんどが女遊びを経験して来ると云うが、俺は3ヶ月間とうとうそれをしないで帰って来てしまった……」氏の隣りに邦子夫人が控えていたためか、最初からどうもよそ行きの話になってしまった。

新築間もないアトリエは15畳くらいの広さのある立派なもの。そのアトリエの正面にはピアノが置かれ、ソファーに腰かけるとまるで応接間に居るような感じだ。

二つ並んだイーゼルの右側は氏が製作中の100号「カーニバルと乞食」、左側には邦子夫人の「たいくつな人達」、80号が仲良く並んでいる。「今年はワイフの方が張切ってるね。2点出来上がった様だ、ところが俺の方は近頃いそがし過ぎてなかなか思うようにいかん。」

聞くところによると、ほとんど毎日帰宅は九時過ぎとのこと、午前3時に起きて7時頃迄の間に絵を描いているそうだ。ブランデーの酔いも手伝って図々しく周囲を物色し始める。まず目に入ったのはピアノの上にあるインド製の金色の水さし、紀元前のものだと云うエトレスク、ローマのアップピア街道でひろった10字もある松笠、ゴッホの描いたのと同じ糸杉の実、変わった形をした大きな貝がら等、まるで博物館のように並んでいる。これらは皆イタリア遊学の際仕入れて来たものだと云う。「イタリアの酒はないんですか」と聞いたら地震のとき棚から落ちて皆こわれてしまったそうだ、まったく残念。今宵ローマの酒に酔って、内心これがアトリエ訪問の最大目的だっただけにがっかり……

邦子夫人が席を立つ。とたんに「面白いものを見せようか」と云って後の書棚からアルバムを出した。開いてみると氏がイタリアで撮ったカラー写真がいっぱいに張ってある。時々背の高い金髪の美人と氏が並んで写っているのが注意して見ていると「この娘は僕がローマ国立美術大学で指導した生徒の一人なんだが、



僕が帰国する少し前、ぜひ私のヌードを記念に描いて欲しいと云うんだ。考えた末とにかく承知はしたがもう期間も無いし、適当な場所も無い、やむを得ず最後の休日の午後彼女を僕のアパートに呼んだ。運悪くこの日は夜6時から会食の席に招かれていたのでわずか3時間足らずで15号を仕上げることにした。それにしても彼女の脱ぎっぷりには感心した。やはり国民性の違いだろうな、しかし狭い室の中で裸になられた時はさすがに俺の方が参ったよ。時間ぎりぎりとにかく仕上げた。最初の約束通りその絵を彼女に渡して、その代り俺はカラー写真で彼女のヌードを撮っておいたんだよ。」

話しながらアルバムの表紙カバーを外すと一枚のヌード写真が出て来た殺風景な壁と粗末な椅子が気になるが立ったポーズなどは実に見事だった。どうやらこれがローマの酒に代る僕への御馳走だったらしい。酒の代りにイタリア美人のヌードに酔って良い気分になった頃には、すでに終バスの時間も過ぎていた。



訪問者 西村 徳一 会員

鈴木 伝 会員

小樽市の天狗山に近き郊外、最上町行きのバス終点より、ひとつ手前で下車、緑3丁目の静かな丘に氏のアトリエがある。前もって連絡してあったので、私が訪ねた時、氏は外に出て庭を眺めておられた。私は少し離れていたが、すぐわかった。挨拶はともあれ、先づ氏の御様子はほとんど回復されたと見えた。うれしかった。暫らく庭の前で立ち話しをした。庭にはバラ、石竹、スズラン、ボタンなど氏が好んで描かれる材料が植えられていた。手入れが下手なので……と謙遜していた。私はそれとなく尋ねた——建物は5年前に氏の設計で新築したものの南面に大きく窓を取り瀟洒で明るい感じである。2年前永い教員生活に終止符を打ち、ここに奥様と2人で住んでおられる。氏は旧制美校の出身で小樽桜陽高校に美術の教鞭を執られた。さて早速案内を受け、氏のアトリエに入る。2階が仕事場である。12畳間、沢山の絵が置かれてある。かなり古い作もある。

サムホル、6号、8号、10号、30号、50号が多い、きちんと整頓されていた。

私は早速、氏の抱負をお尋ねした。

「そんなものないじゃないの、と前置きして——始めから絵かきとしてスタートしたものなら、したい事も随分あったが、教員生活をしたものには、大事な仕事はこれからだと考えている。こんな気持ちになれる自分は幸せだと思う。過去のなまぬるい生活を終えた時、気持ちの整理に1年はかかった。これから充実した生活ができると考えている。……」

次に氏の絵は大きいもので50号位ですがその理由はと尋ねた。特に最近、健康の面で大きい仕事ができない。若者の絵は水まじした絵が多いが、大きさに驚かすより内容のある絵をかきたいと考えている。——氏は小樽で個展を5回、札幌で3回、行っているが公募展には出品してない、その理由はと尋ねた。

「全道展に加えてももらっていることが、最低の義理を果していると考えている、公募展に加わる事は絵かきの本質と考えてないからね……そう云っちゃ何だが……自分の所属団体から離れると泡のように消えてしまう作家がかなりいるんじゃない……他の公募展はよく知らないが、公募展を無にして尚、記憶に残る作家になりたいね……特に最近の公募展に見られる傾向では勉強が足りない、展覧会があるからかく絵が多い、自分の仕事を展覧会に位置づけている「われわれのような環境にあった者から見ると着実に勉強が足りない」と云いたい、私は30歳で始めて公募展に出品した。最近はこの若さでよく出品できるものだと驚く



ことが多い。但し絵が良いのなら別だが……実に早熟だと云いたい。天才が多くなったと逆に云えるかも知れない——氏の言葉には熱気がこもっていた。

尚氏は言葉を続けた。会員のひとりで悪いのが、学生展などは私は全く意義を認めないね。先づ内容がないよ。展覧会に出すための投機的な仕事としか考えられない。興味本位で、当てればよいの考えでは困る。学生のうちから作家気取りを養成したくない。地味な手堅い勉強を積ませたい。教育とはそんなものだと考える。学生展の審査は教師に任せる方法があるかもしれない。

さてこの辺で話題を変え、違う質問をした、「現在燃えているものは、……暫らくして、「そりゃあ別がないね。——今まで氏の言葉を聞いて来た私には意識的な意味ある言葉に聞えた。全道展に出品する氏の30号の絵がある。岩と海の風景である——氏は説明した。実物とは違うんだがね……くずれない丈夫なものをかきたかった。……」

次の質問、共鳴する作家は、

「そうね……独立の作家で創立会員に好きな人がいるね……あえて名前は云わないが、……、…外国の作家ではアンドレ・ドランなど好きな作家だね。」

最後に25周年展を迎えた全道展に寄せる言葉は——魅力のある展覧会であって欲しい。

その後、約30分程雑談をした。氏の若かりし頃の作、その後1936年頃の作、色紙約60枚次々と見せてくれた。正に氏の歴史である強い感銘に打たれた。古い物もよく保管されており、変色がないのに驚いた。始めて氏のアトリエを訪問し、楽しい思いで別れを告げた。——「これからは意義ある生活だ、と言われた言葉通り氏の健斗を心から讀みたい。 1970.6.6記



訪問者 新覚 吉郎 会員

●アトリエ訪問

橋本 三郎 会員

ご免下さい。友のSと先生宅の戸口を開ける。奥さまが言葉にならぬ挨拶と、笑顔で2人を迎えてくださる。先生お邪魔します。中からゆっくり、『オオッ!』と一声、先生の元気なことが分る。明るい室で新聞を読んでいらしたらしく、僕の目をギロリッと見て、『どうだ』という。それからしばらく沈黙が続く。先生のいつものくせで、何かおもしろい話題の催促のようなものだ。先生のお宅には、年中お伺いし、長い時には、10時間もの長い時間制作のお邪魔をしている僕にとって、会からの依頼でなぞと云った所で、先生は取合わぬ事は百も承知なのでお知らせしなかった。先生も国展も無事終り一息ですね。『まあーな』。先生の去年からの仕事は大変な量であった。秋の個展、7月開館の市民会館のどん帳、赤光社代表としての「不死鳥」と題する鍛金制作、開道百年記念依頼作品等。こと鍛金制作にあたっては、先が目キラッと光る。『おい』。ハイッ。『俺はこんな一銭にもならねえ仕事ばかりしておるから、いつも貧乏ばかりしておるんだ。この仕事だって、進んでゆくうちに仕事がおもしろくなり予算をすっかり超過してしまったよ』と、冗談をいわれる。奥さまもかたわらで苦笑されているが、お2人も作品の出来に満足している喜びがあるのだろう。アルバイト学生を指導し、50たらずの日数で仕上げられた。長い時には、12時間も重いハンマーを振りおろしたとのことで、手のひら一杯のママが出来、その痛みで夜目がさめることがあると聞かされた時は、胸の詰まる思いであった。そう云えば何年前に観た、故福島繁太郎氏追悼作品「飛翔」と題する絵肌は、まるで絵具というより鍛え上げられた炎のかたまりのようで、その時の感激を忘れることが出来ない。鍛金制作にあたっては、各大学、市民会館を充分下見分し研究したとおっしゃる。そこには先生の変ることのない制作態度がうかがえる。観察熟考し、造形へと具現されてゆくという初歩的な思想が貫ぬかれているのであろう。

夕方になる。おいとましようと思うが、僕には根たがある。『おいチョットやるか』。待っていたのである。今の僕には先生のゴショウバンにあずかるのが何よりの楽しみなのである。酔いがまわると先生の目は、少年のようにいたずらっぽくなる。『おい、橋本



家の系図はな、そりゃ大変格式のある古いものなんだ……』。はじめたのである。もう4、5回は聞かされているので、Sと顔を見合わせて苦笑する。僕は先生、人間年をとってゆくと妙に自分の出生とか、祖先のことが気になって、よければ安心し、自分の現在に満足をおぼえるのですかと、切り込む。『おいおい、俺はそんな懐古的なことにこだわっているのではない。自分の祖先を少しでも正確に知れる。こんな楽しいことはないじゃないか』。成程、そう云えば先生は日本歴史には、大変興味をもっておられ、こと幕末から維新に関しては精通されている。土方歳三などには、郷土愛の強い先生にとって、身近なゆかりの人物として魅力を感じていらっしゃるようである。今度もどん帳の仕事で京都にゆかれた時、泊った旅館の室が、かつて月形半平太が住まっていたというおかみの話で、すっかり一夜を幕末の世界にひたり、大変楽しい夜だったと話された。『おい、床柱に刃傷もあるんだよ!』ともつけ加えた。『おいS、俺は今度の京都の法隆寺は、何年振りかで、人にわずらわされずに楽しむことが出来たな』。よくお忙しい日程の中で寄りましたね。『うん、それが夕方だったんだが、いや実に静かで、何十年振りかで、以前の静けさと呼び戻した感じだったんだ。寺はちっとも変らぬのだけど、あの人混が静けさをこわすのかもしれない』と先生。数十年前に金堂壁画の修理を見学し、友人の肩車によって食

入るように見たよき時代を懐しげに語る。帰りのタクシーよく見つかりましたね。『うん、運転手に、余り名残り惜しくて、寺を一巡りしてくれと頼んだら断られたよ。そんなことより不思議だねえ。奈良の夕暮の中で土べい越しに見る夕やけ雲は、ほら古い日本美術なぞでみられる。あのかすみのような、あの雲にそっくりなんだ。ああいう雲は、決して勝手に考えだしたものでなく、実際に奈良の風土から描かれたものだと思うんだ』。余りにも素朴な奈良の夕暮を受けとめる先生の心、写実に対するきびしいまなざしを、はっきりと受けとめることが出来た。今年出品された国展の〈炎の空〉という作品は、先生のこのような体験から生まれたものではないかと想像し、作品誕生の秘

密に触れることも出来た。

奥様の心づくしの手料理もすっかり平らげ時計はとうに9時を過ぎている。『おいちょっと出るか』。Sも僕もまっていたのである。奥様は外出の仕たくをされながら、僕の視線と合う。すぐに帰りますからと弁解する。『どうぞごゆっくり』と奥様。今夜もまた、まだまだ楽しい夜が続きそうである。明日もまた二日酔いの洗礼を受けるのがオチである。おやすみなさい。



訪問者 箱根 寿保 会員

松島 正幸 会員

「先生、大変です。お宅の「アトリエ」訪問、私がすることになりました」とお電話すると、「何でもいいからおいで」とのお返事。松島さんは、24,5年前私が絵を描きはじめた頃通った札幌洋画研究所で、三雲先生ご夫妻や田中先生と共に講師の一人であった。私にとってはおそれ多い恩師である。だから気が重い。6月の女流展の出品作もはかどらないしグズグズしていたが、久しぶりに鈴木夫人にもお目にかかりたいし出かけることにしようか——。やっと決心して鷺の宮のお宅に向ったのは、五月晴れのさわやかな日の午後だった。

昔、2回位伺った記憶をたどりながら鷺の宮の駅を降り、しばらく行くと明治牛乳のお店があり、左にまがるとすぐ石の扉、落ちついたうす緑のペンキ塗りのドアが目についた。「松島正幸、鈴木、交楽竜弾」と先生筆と思われる表札、すべて大分古びてはいるけれど、あたりに急にふえた今様の建物にくらべて、昭和10年代のなつかしいふん囲気がある。ドアを押すと、オレンジ色のシャツの鈴木夫人が明るい声で迎えて下さり、早速アトリエに案内して頂く。壁中あふれるような絵、北側の広いまど、椅子とテーブルの他は室中絵と画材が積まれ、気どった様子のないのが気持ちよい。

大島から帰られたばかりの先生が元気に出ていらして、私のあいさつもそこそこ、新作を並べて下さる。イーゼルにかかった50号の港の風景のピンクの空が先ず目につく。それは、北海道庁の旧庁舎が重要文化財に指定されたことと、北海道百年を記念して、赤レン



ガの内部に開拓の歴史画をかざるため、松島さんが依頼された「小樽港の築港」のためのエスキースだった。実物は150号の大作になる由だが、そのためには何枚もの下絵を描かなければならない。いくら松島さんが描き馴れた港風景でも、明治30年ころの小樽港の資料などほとんど無く、大分苦心されているらしい。「4月のスケッチは寒かったなあ」とおっしゃったが、小樽の山なみ、港の船、はたらく人々と、8号位の小品が何枚も出来ていた。もう一度北海道に調査やスケッチに行かれ、それらを合わせて一気にアトリエで仕上げられるようだ。

「絵が残るということは不幸なことですよ」と投げのように松島さんは云う。ある素晴らしいデッサンが、描いた本人も、他の人も気づかぬまま埋もれてしまうこともあるだろう。反対に歴史画という栄光のもとに、自分の意に満たぬ作品が永久に残されるとした

ら、やりきれなくおそろしいことかも知れない。しかしそう思うのは松島さん一流のはじらいであり、杞憂であろう。——先生、大丈夫ですよ——。と私は心の中で思い、それにしてもある課題のもとに描く絵というものは、しんどいことだと想像出来た。北海道庁が開拓の歴史画であれ、出身作家に依頼したということは決して悪いことではない。本当は、その作家の代表作を並べて下さるのなら尚いいのだからけれど——などと生意気に考えたりした。そして私にとって興味のあるのは、近頃の先生の絵の中に時々、少し描きすぎたかしらと思う重いかんじの作品があることだ。私の知っている絵描きの中でも松島さんは、抜群に描ける人であって、(筆が立つということとは絵描きとしての一つの重要な資質だと思う)その人にして画面にアーでもないコウでもないという苦闘のあとが残っているということに敬意を感じる。昔、研究所は中島の中根光一氏のお邸で開かれていたのだが、先生はその別棟に住んでいらした。それなのに私達研究生の絵はさっぱり見て下さらない。雪のあとの寒い冬の日、私や岸葉子さんや何人かが炭火をおこし、ふるえながら描いていると、窓の外をアノラックを着、50号のカンパスをかかえて先生は通りすぎて行く。アトリエをのぞこうともせず。「よく描く人だなあ。」と私達は感心もしたけれど、先生から相手にされぬくやしきもこみ上げてくる。才能もない画学生の絵など、どうでもいいのでしょと私はヒネクレ、きつと見返してあげましようなどと思ったものだ。

けれど今になって思うと、あの頃先生は30代、終戦後の疎開生活も大変だったろうし独立展の会員になれる前のことだったのだ。そう云えば、札幌でお会いする時の先生はひどくあわだだしくて、忙がしうだけれどこうやってアトリエにいられると、落ちついて安心してお話が出来る。鈴子夫人が苺ミルクを出して下さって、3人で頂きながら私はすっかりのんびりして、内輪話などはじめてしまった。鈴子夫人は昔から美しく聡明な方だったけれど、今も少女の様に純真で気どらない。華族のお姫だったのだから、お2人で絵の道を続けて来たのには、いろいろむづかしいこともご苦労もあったことと、夫婦絵描きの後輩である私は考えるのだけれど、そんなカゲなど少しもお見せにならない。日頃のお作品から見てもきつとシンの強い方なのだろう。目下、苦勞の頂点にいる様に思っている私は、こんなにカラッとになりたいと思う。

松島さんが、秋には夫人と共にヨーロッパに行かれるとおっしゃるのを、うらやましくお聞きしながら、ふと気がつくともう伺ってから2時間もたっていた。

大切なお仕事の時間をさいたことをお詫びし、おいとまする時、ふと交楽氏が見えないのに気がつき、「坊っちゃんは何？」とお聞きすると、「この近くに住んでいます。」とお2人共うれしそうにおっしゃった。

鶯の宮の駅に急ぐ道で、私は鈴子夫人のお作品を見せて頂かなかったことを残念に思った。これでは訪問者として失格ではないか。しかし夕方近くのさわやかな風をうけながら、矢張り伺ってよかったと思い、とてもいい気持ちだった。



訪問者 八木 伸子 会員

米坂ヒデノリ 会員

雪印工場からの、ゆるやかな坂をゆっくりのぼりつめると、そこに先生のお宅がある。浪花町から越されて来た頃は、この辺り帯はまだ家もまばらであったが、ここ数年のうちにとりどりの家が並びはじめた。それでも下町のようなせわしい車の騒音もなく、いたって閑静な高台である。

アトリエは住居とは棟続きになっていて、入るとすぐに、芸大時代の裸婦の石膏像が二体、迎え入れるように立っている。その足もとには、木彫の原型になった「島影」や「凍原」などのブロンズの小品が並び、木とはちがった鮮やかな触感が目をたのませてくれる。なんども来なれたアトリエだが、いつ訪れても嬉しい。

その部屋からもう一つドアをひくと、そこに先生の仕事場がある。片側には、これまで幾度も見慣れた「母子像」「防雪林」などが並んでいて、新築されたところは、広い感じであった12坪ほどのこのアトリエも、今ではいつの間にか手ぜまさを感じさせる。廻転台の上には、去年から制作にかかっている母子像が、すどいみのあとの中で、大きく形をのぞかせはじめていた。

「作品とは排泄物なのだ」

と先生は云われる。要は、「それが美しいか きたないかの違いですよ」と云う。そしてそれは又、「生

きている事への証しであり、アリバイなのだ」とも云われる。

「日本人の中には二つの異ったものがある。それは、精神性の強いものを求める一面であり、もう一方には、形だけの美しさ、華麗さを求める面である。このまったく異なる心を内在させる面を持っている。それがいいか悪いかは、もっと後の時代に判断されるのではないだろうか……。歴史が審判すると思う——。」自分自身に云いきかせるように、先生の話は続けられた。

「自分にとって、彫刻はもっとも確実にたしかめられる造形言語であり、木彫が多いのは、抵抗なく仕事ができる素材よりも、苦勞しながら実際に刻みつけていく方に、より強くひかれるからだ。」と

作品をみて感じられるものがあるならば、その一つは「愛」ではないかと思う。そして愛を問いつめていくとき、それは「祈り」にたどり着くのではないだろうか。かつて秋山画廊で個展をなさったとき、ある人に、クリスチャンかと聞かれたときがあったと話された事があった。

先生の作品をみると、祈りに似たものを感じるのには僕だけではないだろう。

豪快さのかけにひそむせんさいさ。

流麗さのかけにひそむ土くささ。

叫ぶこともなく。

力みかえることもなく。

愛が、そこにあった。

昨年、釧路市は開基百年を迎え、その祝いににぎわった。そのとき先生は

「地上に生を受けた人間の歴史からみれば、百年のくぎりは、あまりにもささやかな時代区分ではないか」と云われた。地質学上からみれば、百年は取るに足らない時の流れであっても、世紀は一つの区切りをつける。先人の苦勞をしのび、業績をたたえる事はそれなりに意義を認めながらも、数千、数万年の原始から、ここに先人が生を営んでいた事実を目をむけられる。堅穴住居跡に散乱する紙くずに、開拓者と征服者を同義語にした精神の貧困をみる、となげかれる。

時の流れにおしやられ、かえりみられることもなく、うずもれ去った「心」に対する愛。それは北国の



素朴な形態となって、哀しい祈りにもつながっているのではないか。過去の歴史をも含めた、不条理に対する筋骨。そこに僕は、先生の彫刻の中に流れつらぬかされているものの、愛の本質の一面を見出し得たように思えた。

制作中は、小さなFMステレオからいつも音楽を流しておられる。先生の音楽は、パロックから近代までその幅は広く深い。そうした中でも、モーツアルトのあのイ長調のクラリネット五重奏曲は、最も好きな一つのようなのだ。

今は「読んでおかなければならない本が沢山あってネ。この処あまり制作もしていない」とぼさついた髪をかき上げながら笑う。(国際コンペで入選した建築家、岡田新一氏の設計になる最高裁の建築に彫刻家として参加するための勉強だと云う。) 歴史の大事業といわれる新庁舎建築だけに、「男子一生の仕事だ」と先生は嬉しそうだった。5年かかるのか、10年かかるのか、ともあれ、全力をあげていい仕事をなさって欲しいと願いながら——。

夕暮れのせまったアトリエを辞した。



訪問者 齋藤 一明 会友